生田川水辺空間の整備

神戸市土木局防災部
河川砂防課長　寺島建夫

はじめに

神戸のまちは、慶応３年に神戸港が開港して以来、港を中心に発展し、日本を代表する貿易港として現在に至っており、また最近ではポートアイランド、六甲アイランドに見られるような近代的港湾施設を有し、ますます発展している。

一方、街並みについては、瀬戸内の一番東の端にあたる六甲山系を中心として、自然と調和した街並みを形成している。また市域の面積は約540平方キロメートルで、人口は約145万人で、そのうち８割が六甲山系の南側の既成市街地に集中している。

以上のように開港以来順調に発展してきた反面、防災面から見ると既成市街地の背後にある六甲山系は非常に地形が急峻で、その上表土は風化花崗岩で崩壊しやすく、また河川は急勾配で、川幅も狭く、流路も短いことから、梅雨期、台風シーズンの豪雨時には鉄砲水となり、過去何度か災害を起こしている。特に昭和13年、昭和42年には想像を絶する未曽有の災害を受け、以後河川改修をはじめ砂防事業等土石流対策を国、県、市が一体となり推進している。

水辺環境整備の緊要性

近年、都市部における貴重なオープンスペースである河川空間を、「うるおいとふれあい」のある水辺に整備してほしいというニーズが全国的に高まり、建設省においても、良好な水辺空間の形成などを目的とした「ふるさとの川モデル事業」の制度が昭和62年12月に発足された。

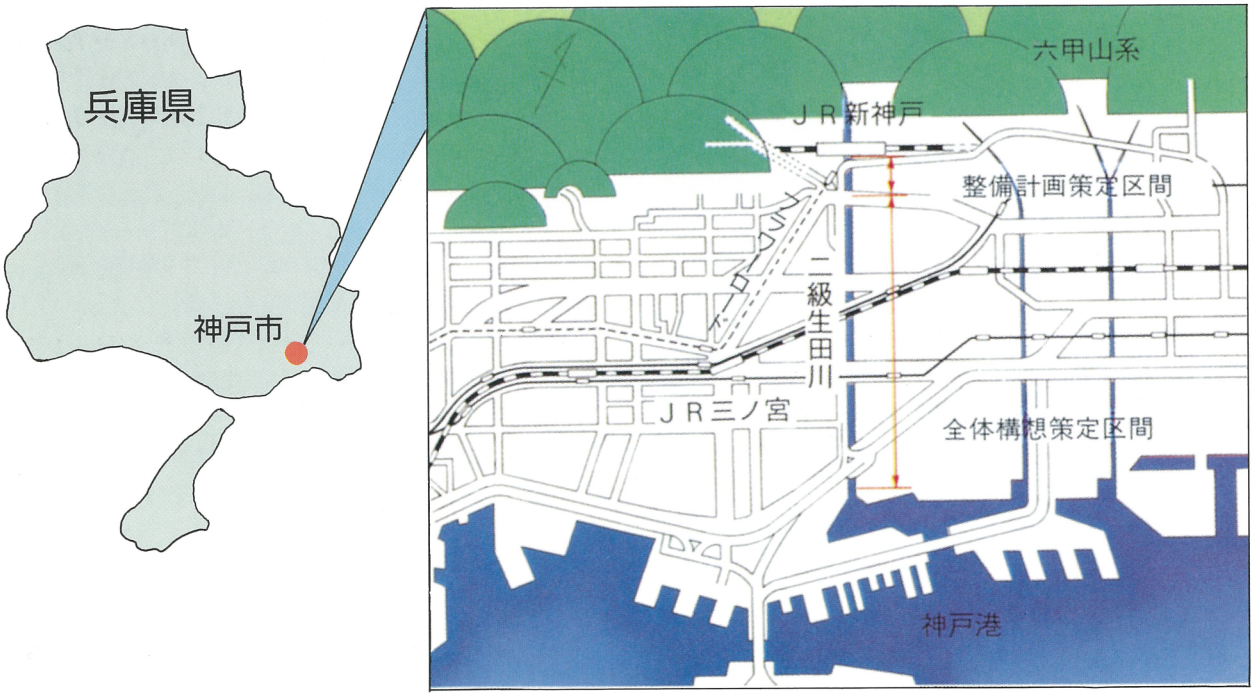
本市においても、マスタープランの中で、河川・湖沼などの水辺はできる限り親水機能をもったものにすると位置付けている。

以上に基づき昭和54年度に、２級河川都賀川で水遊び場を設置し、昭和57年度～60年度には、２級河川住吉川で高水敷等の整備を行い、昭和62年度～昭和63年度では、２級河川生田川で「ふるさとの川モデル河川」の指定を受け、「ふるさとの川モデル事業」として神戸のシンボルとなるような整備を行なった。

生田川の概要

生田川は、六甲山系の山深くを源流として、多くの谷を野趣に富んだ渓流となって流下し、ＪＲ新神戸駅をくぐり抜けて、市街地を南下して大阪湾に注いでいる。

明治初期の生田川は、平地に出たところで現河川より南西の方向(現市役所前のフラワーロード）に流れて港に注いでいたが、洪水のたびに多量の土砂を流出して港を埋め、外国船の停泊に支障が生じたり、居留地に被害をもたらしたため明治４年に現在の位置に付替えられた。その後一度は暗渠化され、河道の上部を遊歩道、公園として使用され



施行前の生田川

ていたが、昭和13年の阪神大水害により暗渠が閉塞し、大災害を起こしたことから開渠に改修された。

この改修に際し、治水面を重点に行なったため、

❶コンクリートの三面河道。

❷河床が急勾配で川幅が狭く、深い。

❸高水敷がない。

❹平常時の水量が少ない。

という状況にあり、親水性・景観性に乏しい河川であった。

しかし本川の水質は、流域の大部分が山地であることから良好なものであった。

河川整備の基本方針

本市では、都市景観の形成を進める上で次のようなまちづくりを目ざしている。

❶都市空間を特徴づけている海・坂・山の地形、市街地の骨格を形成する河川や幹線道路等を『神戸を代表するシンボル』として育てていく。

❷生活空間におけるアメニティを追求するため生活環境の安全性・保健性・利便性などの質的向上を図るとともに、機能性・量的側面の整備と一体となった施設体系を確立する。

これらの基本方針をふまえ、新幹線新神戸駅前で神戸の表玄関の顔として、市民に親しまれる河川空間の創出とまちづくりの軸として位置付け、生田川の河川環境整備を計画した。

❶水に親しむ場として河川空間と周辺空間の一体的な利用を図り、豊かな水の流れを創造する。

❷神戸を象徴する水辺空間の拠点として整備する。

❸生田川を軸とした景観及び歩行空間としての連続性の向上を図る。

といった点を基本方針として整備を進めた。

整備のポイント

❶清流の復活

水量の少ない河川にやすらぎとうるおいをもたすため六甲の地下水を導水し、河川水と共に循環利用することによって、生田川に清流を復活させる。

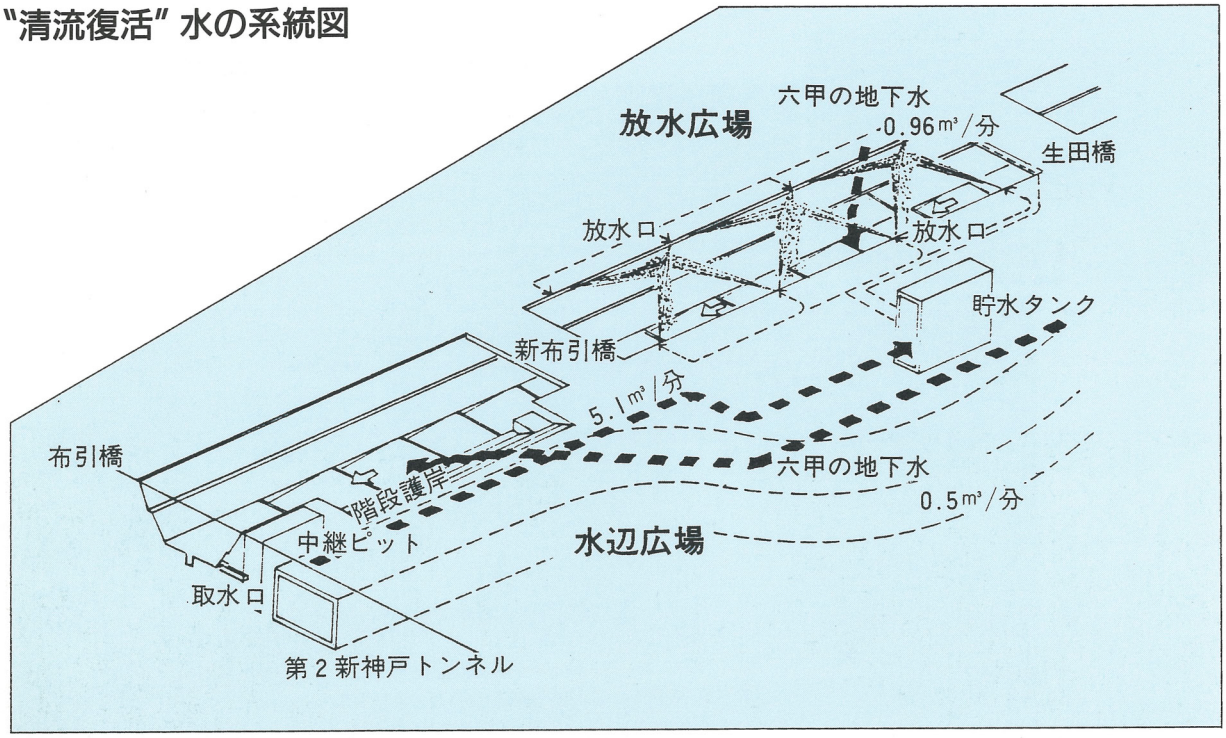
❷放水広場の整備

生田川にシンボル性を付与するため、河岸上に噴水を設けて、川の存在観を浮き上がらせる。

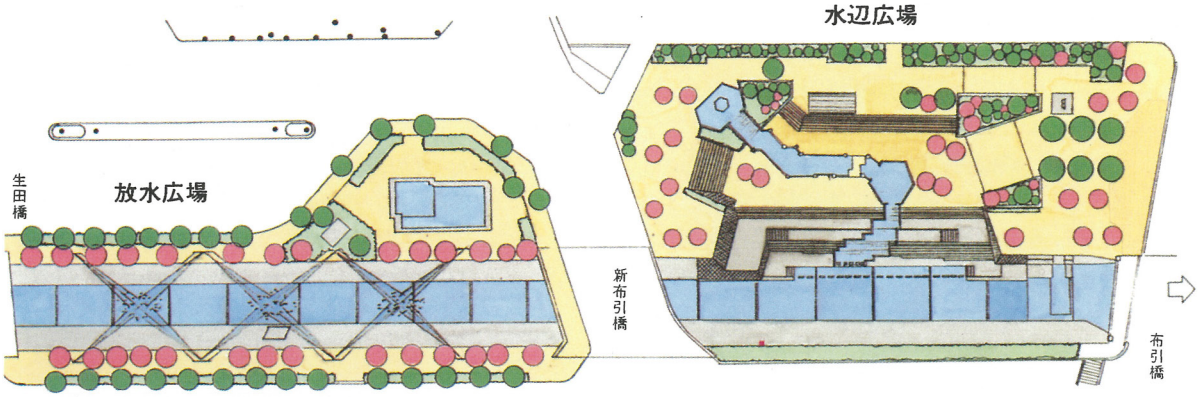
❸水辺広場の整備

直接水に触れたり、水を見ながら、憩いうるおえる広場を整備するため、隣接する生田川公園と河川とを一体的に整備する。

"清流復活" 水の系統図



水の演舞：放水広場



水辺の賑わい：水辺広場（愛称：ふれあい広場）

おわりに

以上のような計画に基づき、昭和62年度から昭和63年度にかけて施工したが、一般的に河川環境整備を行う場合は、できうる限り自然を生かし、また失われた自然を復元する。言い換えれば自然といかに調和した整備を行うか、という事に重点がおかれることになろう。

しかし生田川の場合は、全くと言えるほど自然は残されてはおらず、唯一清らかな水があるにすぎない状態であった。又周辺の高度化された都市景観の面からも自然を追求することは困難であると考え、人工美を追求することに重点を置いた。そのため完成後市民に親しまれるかどうかという危惧はあったが、今年４月９日のオープンの日をはじめ、日常の利用も多く、現在のところ成功ではなかったかと考えている。

今後とも、市民と行政が連携し、末永く愛され、親しまれるよう念願しているところである。